

# 第49回 福岡県地方史研究協議大会

## 福岡県の近世城郭4 陣屋

主催 福岡県教育委員会  
共催 福岡県地方史研究連絡協議会（福史連）  
期日 平成27年6月27日（土）  
会場 福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下1階）  
日程

13:00 開 会

◆主催者あいさつ

◆福史連会長あいさつ

13:10 講 演【筑前】（45分）

「筑前の陣屋 -秋月陣屋と直方陣屋-」

講 師 岡 寺 良 氏

13:55 講 演【豊前】（45分）

「日本で最後に築かれた城 -旭城のことなど-」

講 師 山 内 公 二 氏

14:40 休 憩，地方史フェア

15:00 講 演【筑後】（45分）

「三池藩立花家の歴史と三池陣屋について」

講 師 梶 原 伸 介 氏

15:45 質 疑 ・ 応 答

16:00 閉 会

# 講師プロフィール

## ◎ 岡寺 良 氏

現 職	九州歴史資料館学芸員
専 門	考古学
研究テーマ	北部九州の戦国期を中心とした中近世城館研究
主な著作	『歴史史料としての戦国期城郭』（共著）花書院 2001年 『福岡県の名城』（共著）海鳥社 2013年 『福岡県の中近世城館跡Ⅰ・Ⅱ—筑前地域編1・2—』 （共著）福岡県教育委員会 2014・2015年

## ◎ 山内 公二 氏

現 職	美夜古郷土史学校事務局長 行橋市文化財調査委員
専 門	近・現代史
研究テーマ	地域の産業史・交通史
主な著作	『京築風土記』美夜古郷土史学校 1977年 『写真集 明治大正昭和 行橋』（ふるさとの思い出187）（共編）1981年 『京築の文学碑』（共著）美夜古郷土史学校 1984年

## ◎ 梶原 伸介 氏

現 職	大牟田市立三池カルタ・歴史資料館館長
専 門	幕末維新时期
研究テーマ	近世から近代移行期における地域社会の変容
主な著作	<b>【分担執筆】</b> 『図説 南筑後の歴史』郷土出版社 2006年 『国絵図の世界』柏書房 2005年 『福岡県の幕末維新』アクロス福岡 2015年 『菊水町史』『宇土市史』『荒尾市史』『みやま市史』 <b>【論文】</b> 「明治十年代における三池築港構想をめぐって—立花種恭宛大鳥圭介書簡の検討—」『地域史料研究会・福岡 研究会報』第3号 2012年9月

## 「筑前の陣屋 —秋月陣屋と直方陣屋—」

九州歴史資料館 岡寺 良

### はじめに

筑前における近世の陣屋には、福岡藩の支藩であった直方（東蓮寺）藩と秋月藩の陣屋がある。両藩の陣屋の概要・構造等について、現地踏査・絵図資料・発掘調査データなどを元に述べることにし、さらにこれらが「城」ではなく、「陣屋」あるいは「御館」と称されていたことに着目し、「城」との相違の有無について、筑前領内の近世城館として、福岡城、筑前六端城、さらには幕末・維新时期に築造されたいわゆる「幕末期城郭」を比較事例として考えてみたい。

### 1 秋月藩

秋月藩は、黒田長政の三男・長興を初代とし、寛永元年（1624）に福岡藩の支藩として石高五万石で立藩され、戦国時代の国人領主・秋月氏の本拠であった秋月の地に藩庁（陣屋）が置かれた。同藩は幕末まで存続し、廃藩置県後は、表御殿は秋月県庁舎、奥御殿は梅園御館（黒田氏邸宅）となった。

### 2 直方（東蓮寺）藩

直方（東蓮寺）藩は、黒田長政の四男・高政を初代とし、元和 9 年（1623）に高政は鞍手郡東部四万石を拝領する。藩庁の位置については、当初、筑前六端城の一つ、鷹取城の麓なども候補として上がるが、最終的には遠賀川西岸に面した東蓮寺（現在の直方）に設置された。当初の東蓮寺藩の館は、後に双林院・御永蔵が置かれた場所に位置したことが絵図等により判明している。

その後、東蓮寺藩は、延宝 3 年（1675）、東蓮寺を「直方」に改名。直方藩となるが、2 年後の延宝 5 年、三代直方藩主・長寛が、福岡藩世子を継ぎ、藩主不在となった。本来ならば幕府に収公されるべき藩領であったが、直方藩領は福岡藩預かりとなった。

元禄元年（1688）になると、三代福岡藩主・光之の四男・長清に直方五万石が与えられ、直方藩が再立藩され、東蓮寺藩の御館の西側背後の御館山に居館が新築された。

しかし、享保 5 年（1720）、長清の子・五代直方藩主・継高が六代福岡藩主を継ぎ、継嗣がなくなったため、直方藩は廃藩、藩領は福岡藩に収公され、再び直方に支藩が生まれることはなかった。

### 3 秋月藩陣屋の構造

秋月は北九州方面から南下し、久留米方面へ至る秋月街道の通過点に位置し、八丁峠を越えた古処山の麓、秋月の盆地に城下は位置する。城下の東端、現在、秋月中学校・垂裕神社の敷地が秋月藩の陣屋が置かれたところである。

陣屋の構造は、秋月街道から南へ分岐する杉ノ馬場に沿って築かれた水堀の東側の低丘陵上に位置し、北側に表御殿、南側に奥御殿部分が置かれ、表御殿に置かれた大手門には瓦坂の入口が置かれて勢溜とつながっており、奥御殿に置かれた長屋門からは水堀をはさんで内馬場に通じていた。水堀に面した斜面上部には高さ約 1～2 m ほどの石垣が築かれ、

表御殿側には四箇所の櫓が構えられていた。大手門も御殿内に入ると右折するいわゆる「枡形」の形状を呈していた。

#### 4 直方藩陣屋の構造

直方は、遠賀川中流域西岸に面した平地に位置する。当初置かれた東蓮寺藩の居館は、直方藩時代の様子を描いた直方惣郭図には、御館山の東麓に約四十間四方の略方形の水掘りに囲まれた双林院と御永蔵の区画にあったとされている。類推するに周囲に役所などの藩庁機能を有する機関が置かれていたものと考えられるが、絵図等の証拠がなく不明瞭である。直方藩五万石の長清の時代に、御館山に館は移され、麓に表御門と裏御門を備えた陣屋を構えたことが「直方惣郭図」により知ることができる。御殿部分は、表門からは主要な入口となる中門へ、裏門からは名称は不明であるが、中門よりもはるかに小型の通用口的な門へ通じていたことが「直方御殿御絵図」によりわかる。

直方藩の御殿および城下町は、明治時代以降、鉄道開削、炭鉱開発等により、現在、江戸時代以前の様相を知ることが非常に困難となっている。しかしながら、絵図資料と現地を詳細に照合していくと、堀や地割りの痕跡を知ることができる。

#### 5 城と陣屋—筑前の近世城館の事例から—

冒頭にも述べたように、秋月と直方二つの陣屋は、「城」ではなく「陣屋」、あるいは「御館」、「御殿」として認識されていた。いわゆる「城」との相違点がこれらの陣屋にあるのであろうか。

福岡城は、慶長6～12年（1601～07）に築城された、言わずと知れた福岡藩52万石の居城である。また、福岡城と共に築造された筑前六端城（若松城・黒崎城・鷹取城・麻氏良城）の構造を見ると、虎口には枡形虎口を採用、虎口付近には多間櫓などの櫓建築を伴う横矢掛かりによる嚴重な防備を実現、さらには城の中枢に至るまでにはこのような虎口を多重に設けた完全防御の「城郭」であることがわかる。これは、関ヶ原合戦後における豊臣と徳川のいわゆる「二重公儀体制」による軍事的緊張による領国防備の一環であったと想定されるが、このような状況も慶長20年（1615）の大坂夏の陣での豊臣氏の滅亡により解消、続く元和の一国一城令により六端城も破却された。

そのわずか9年後に築造された秋月陣屋では、水堀、石垣、櫓台、折れを持つ大手門など、近世城郭としてのパーツは備えているものの、六端城や福岡城に比べ防御性は非常に控え目なものとなっている。さらに70年後に新築された直方藩陣屋に至っては、絵図を見ると表御門付近には折れを持つ虎口空間や横矢を掛けることの可能な水堀の屈曲は存在するものの、隅櫓や多間櫓などの防御を主たる機能とする城郭建築は一切なくなっている。

このように徐々に防御性を弱めていく傾向は、幕末に築造された福岡藩の犬鳴別館や他藩の御殿や館の事例など、「陣屋」「館」「御殿」と称する城館に共通する。その一方で、福岡本藩の「居城」福岡城は、一国一城令後はむろんのこと幕末まで築城当初の防御性を保っていったこととは全く対照的であるといえよう。

※直方陣屋の現地調査に際しては、牛嶋英俊氏（福岡県文化財保護指導委員）の協力をいただいた。感謝申し上げます。

<主要参考文献>（秋月陣屋・直方陣屋に関してのみ）

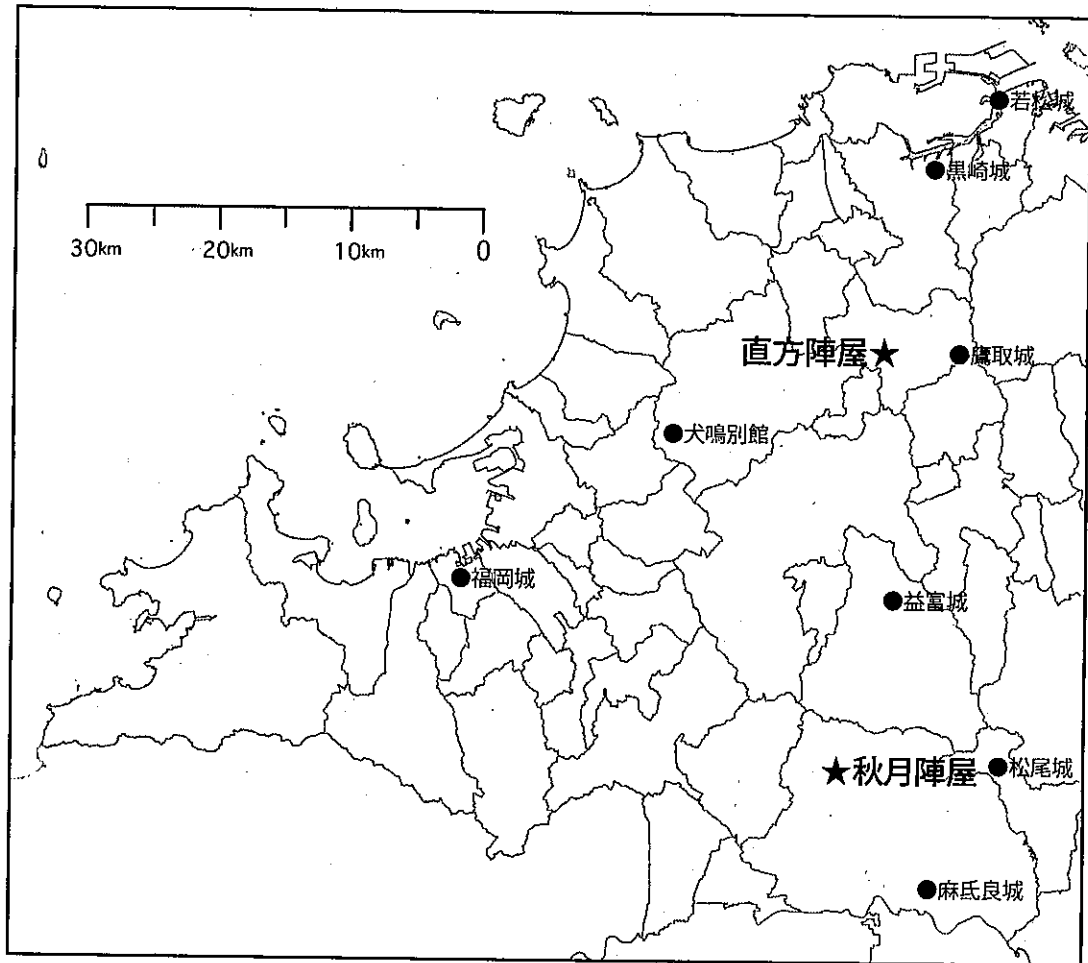
甘木市教育委員会 1981～1984『筑前秋月城跡Ⅰ～Ⅳ』

牛嶋英俊 1986「歴史地理学に見た直方城下町の成立」『郷土直方』第14号 直方郷土研究会

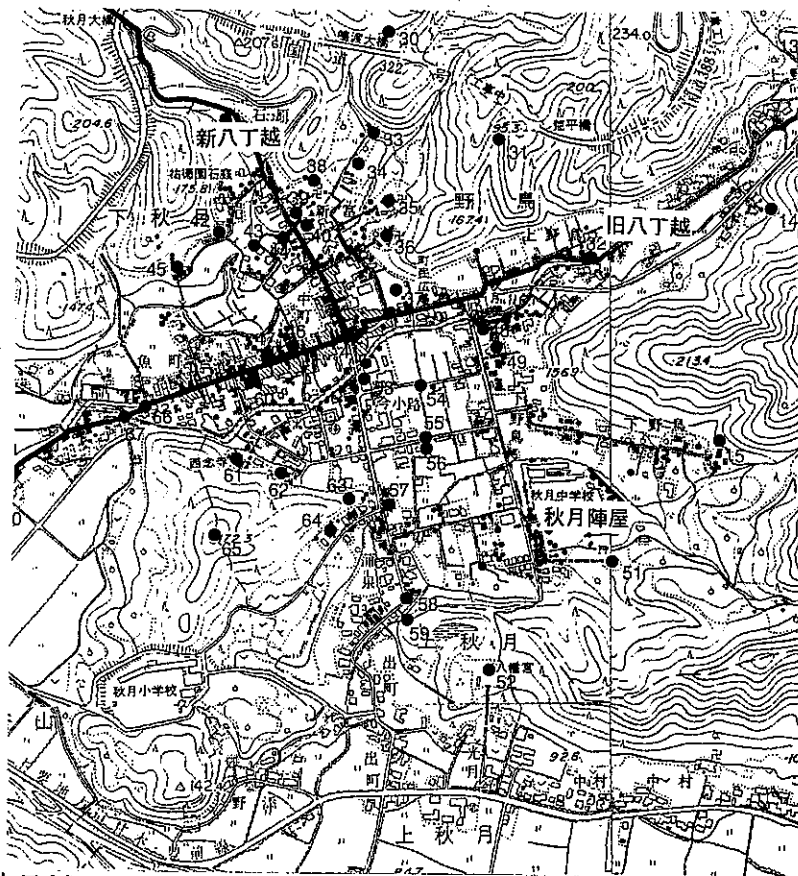
直方市教育委員会 1995『須崎町公園遺跡』

福岡県教育委員会 2014『福岡県の中近世城館跡Ⅰ—筑前地域編1—』

福岡県教育委員会 2015『福岡県の中近世城館跡Ⅱ—筑前地域編2—』

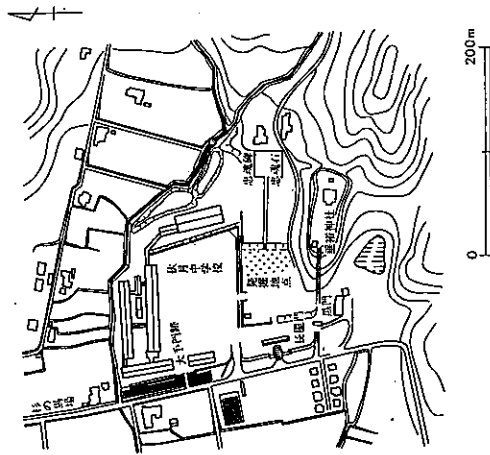


本報告で扱う近世城館位置図

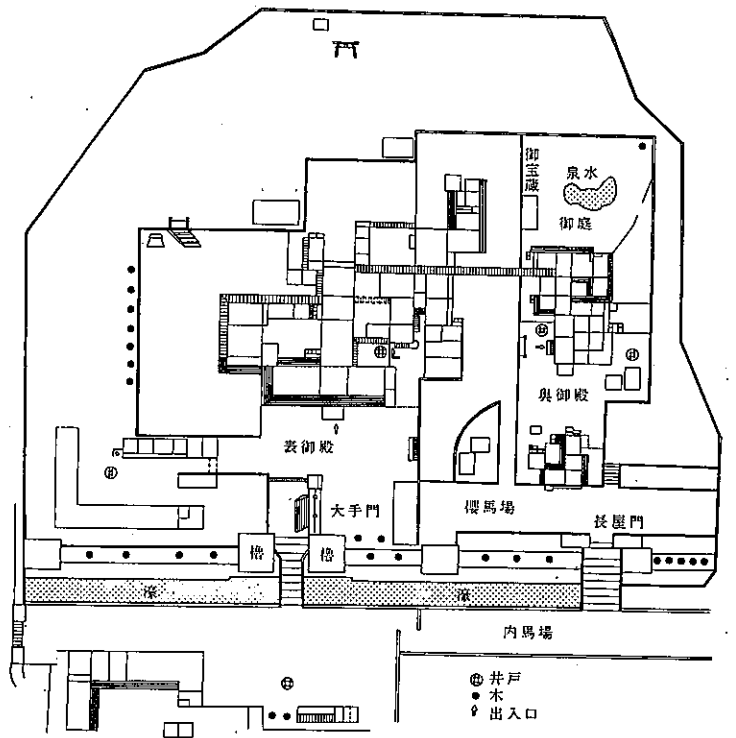


秋月城下町及び陣屋位置図 (福岡県教育委員会『秋月街道』より転載)

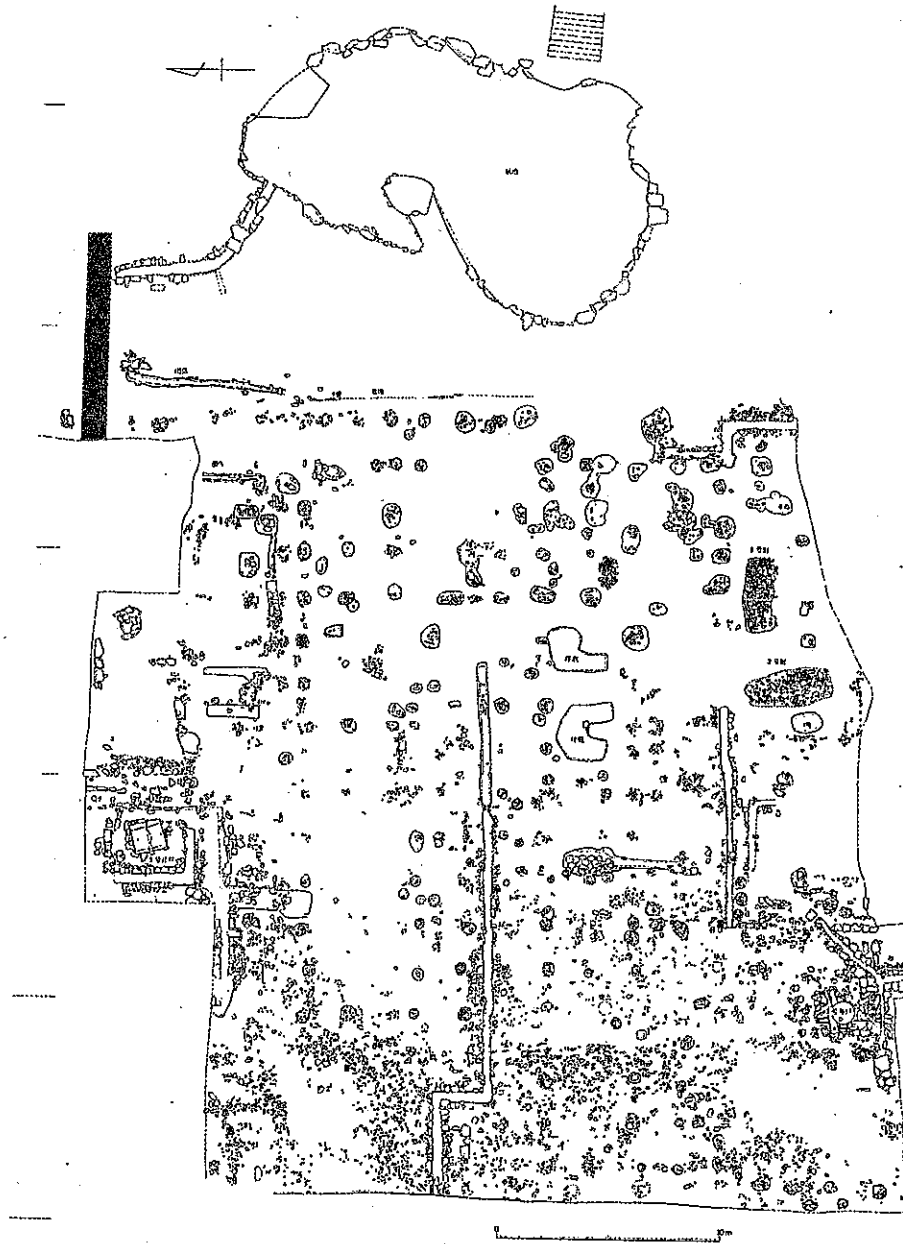
# 秋月陣屋



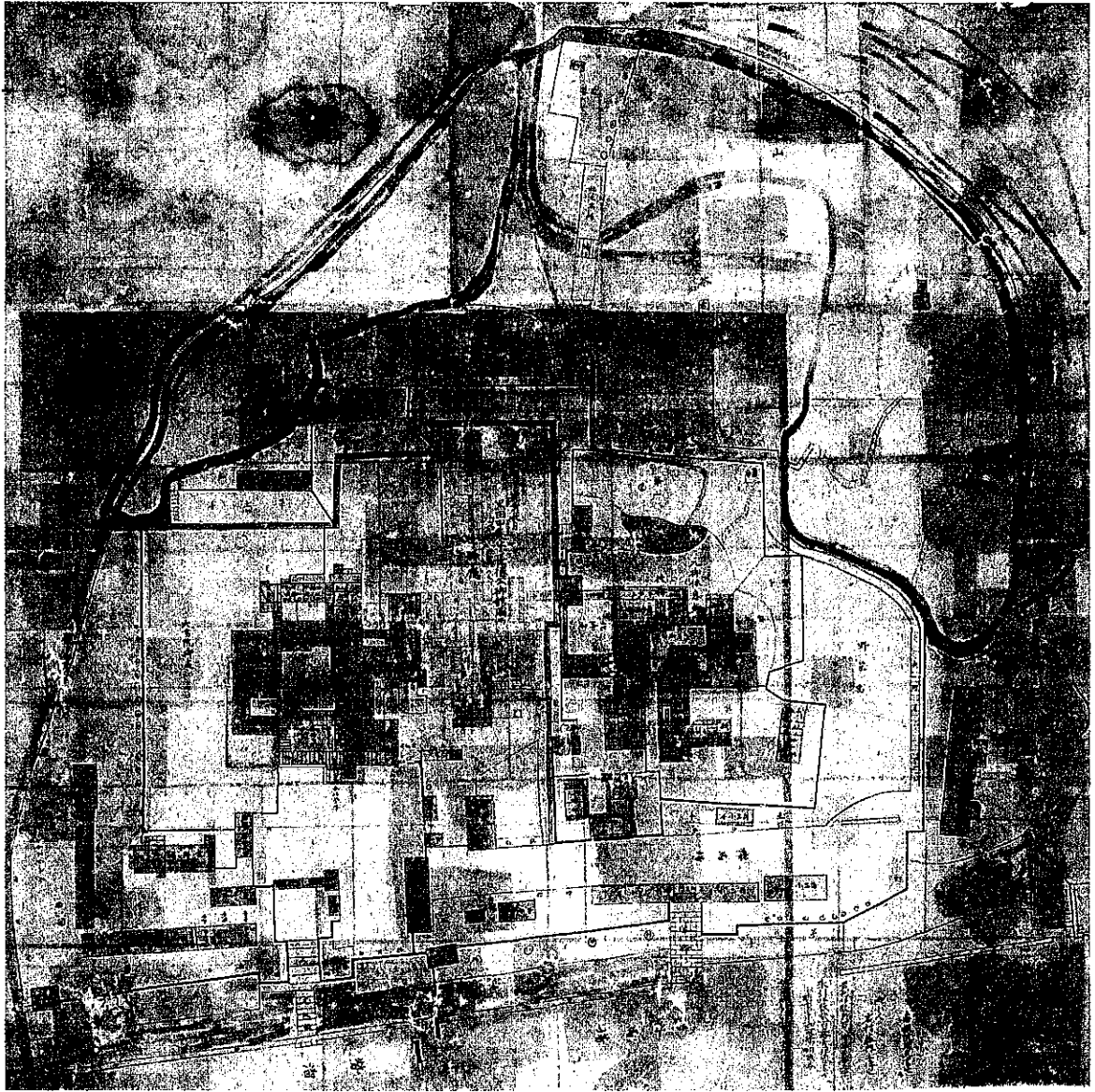
秋月城跡付近地形図



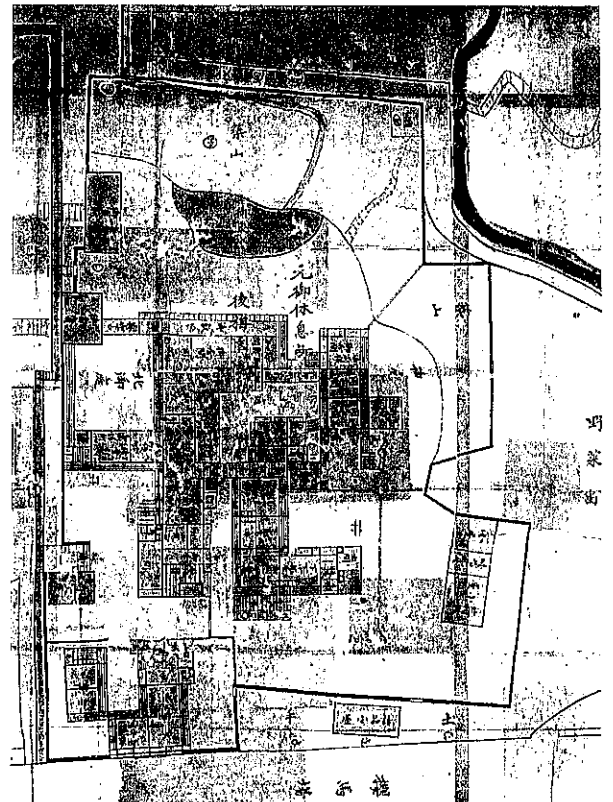
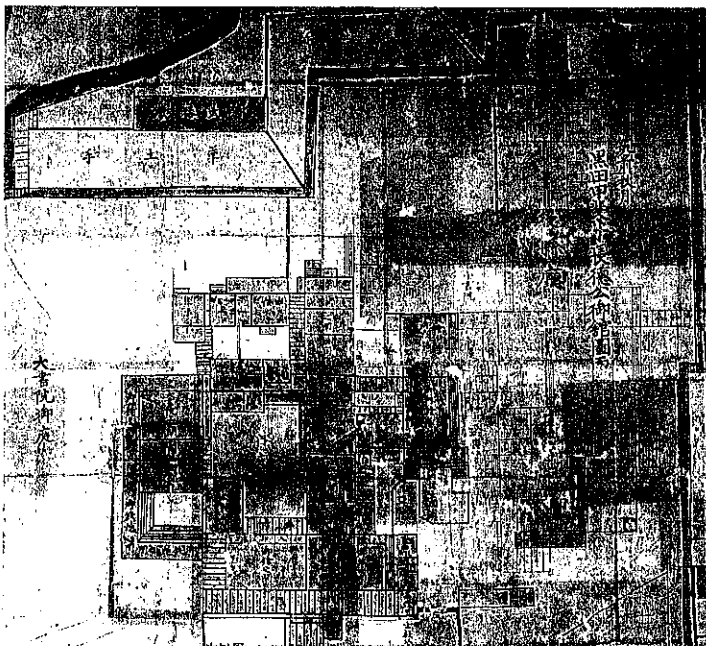
秋月城絵図面 (19世紀中頃 幕末)



秋月陣屋奥御殿発掘調査遺構平面図



筑前秋月黒田甲斐守長徳公御館図面（朝倉市教育委員会蔵 縦181cm×横183cm）

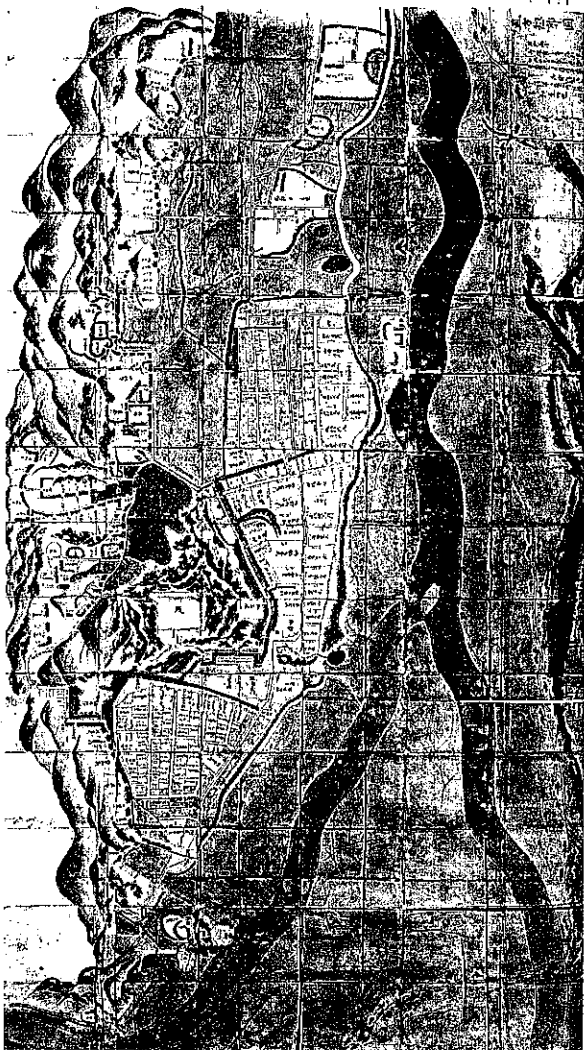


筑前秋月黒田甲斐守長徳公御館図面（左：表御殿部分 右：奥御殿部分）

直方陣屋

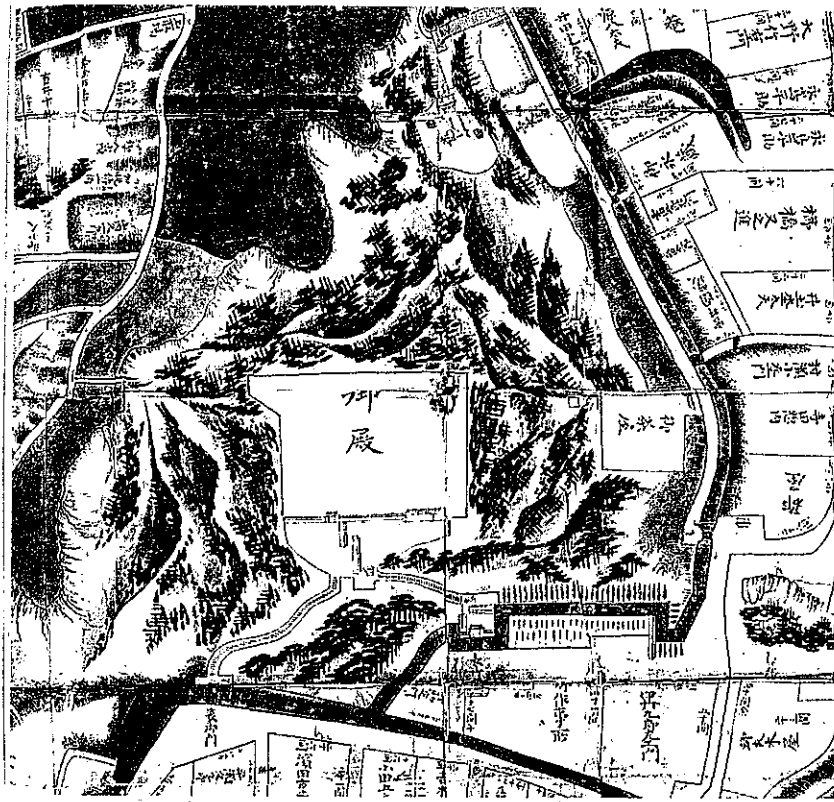


直方惣郭図 (部分トレース)

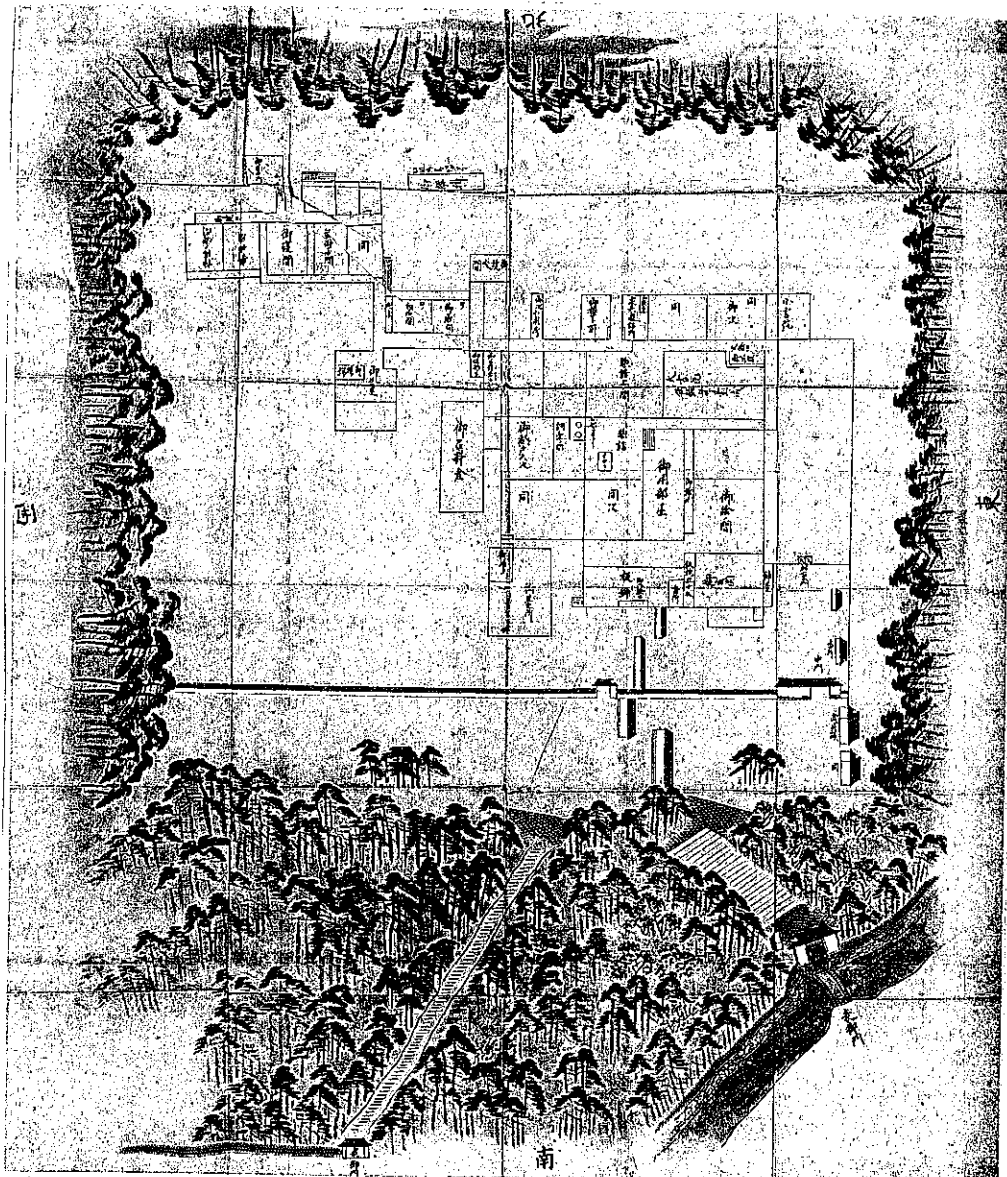


直方惣郭図 (個人蔵)





直方惣郭図（部分・個人蔵）（御殿の右上の狗形の塀の下が旧藩主館跡地）

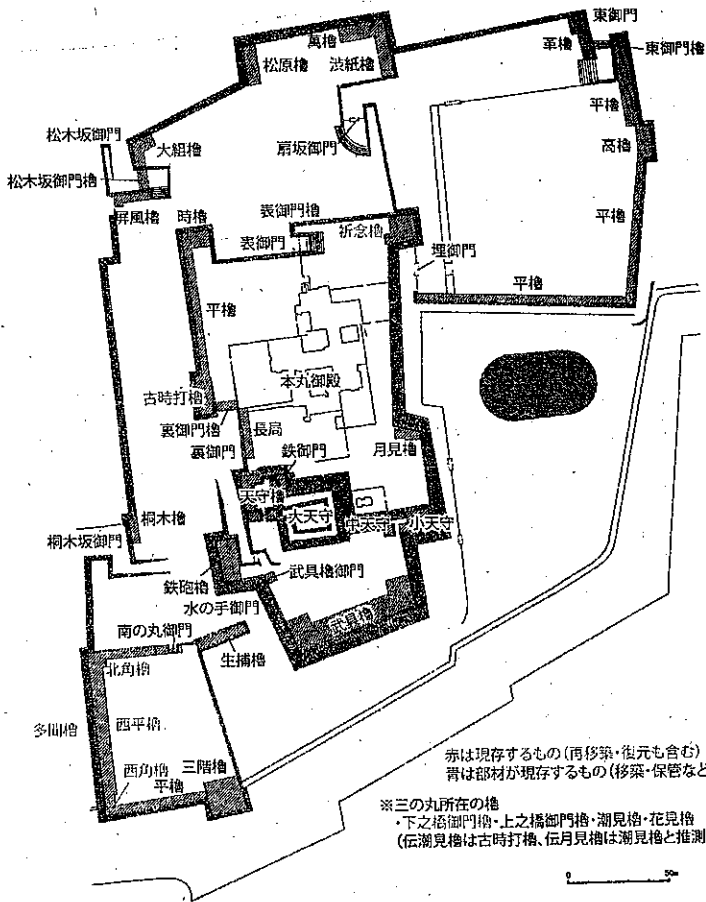


直方御殿御絵図（個人蔵）

福岡城

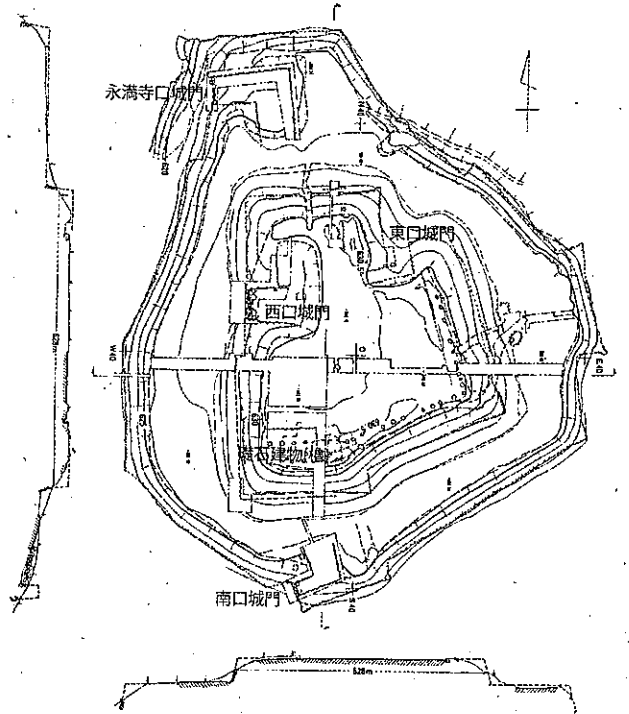


福博惣絵図 (部分・福岡市博物館蔵、一部改変して九州歴史資料館作成)



赤は現存するもの(再移築・復元も含む)  
青は部材が現存するもの(移築・保存など)  
※三の丸所在の櫓  
・下之櫓御門櫓・上之櫓御門櫓・潮見櫓・花見櫓  
(伝潮見櫓は古時打櫓、伝月見櫓は潮見櫓と推測される)

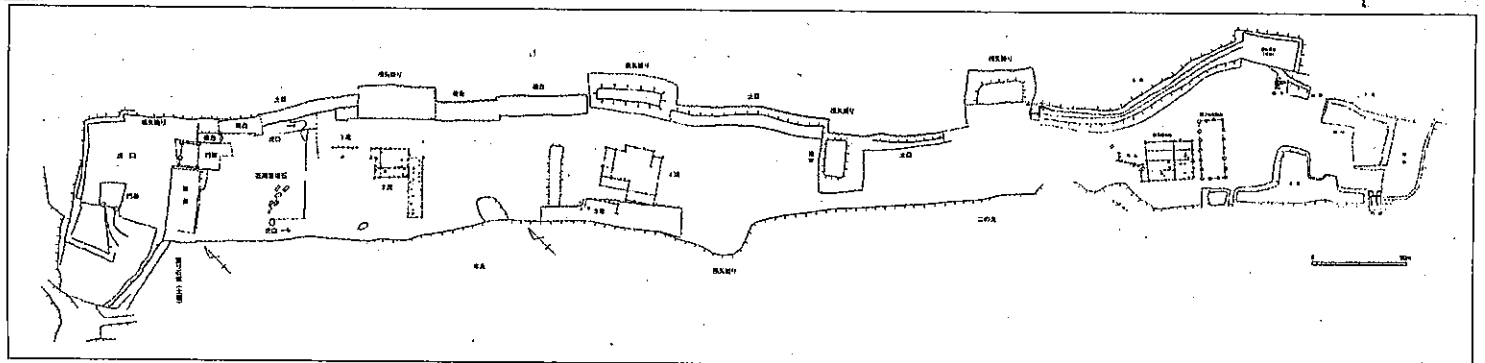
鷹取城 (筑前六端城)



鷹取城主郭部測量図

(文献 62 掲載図を一部改変して九州歴史資料館作成)

益富城 (筑前六端城) 福岡城本丸・二ノ丸所在の門・櫓位置図

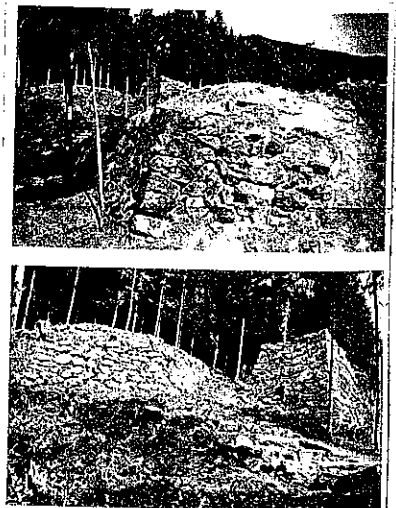


主城部分平面実測図

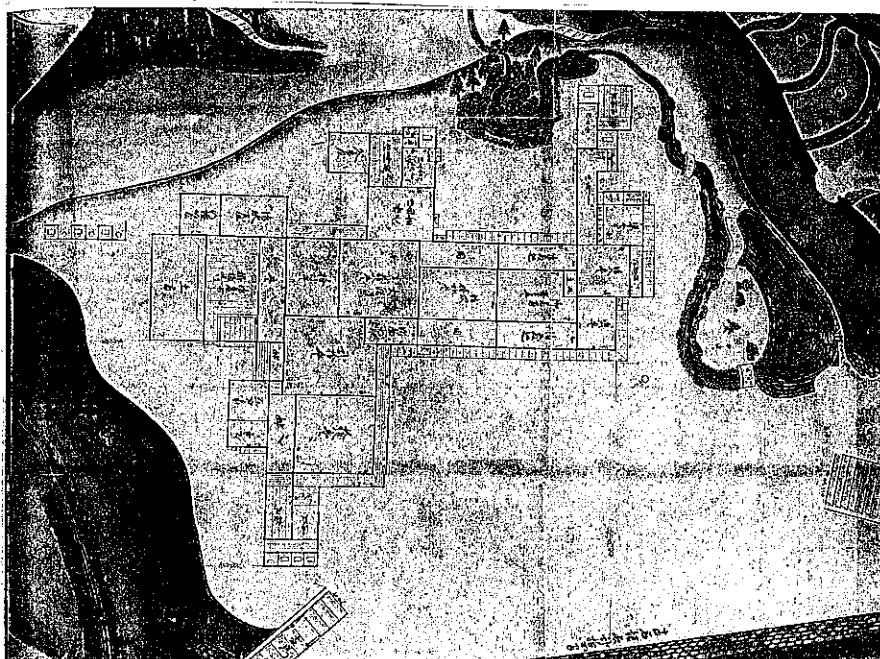
犬鳴別館



犬鳴別館絵図（宮若市教育委員会蔵・宮若市指定文化財）

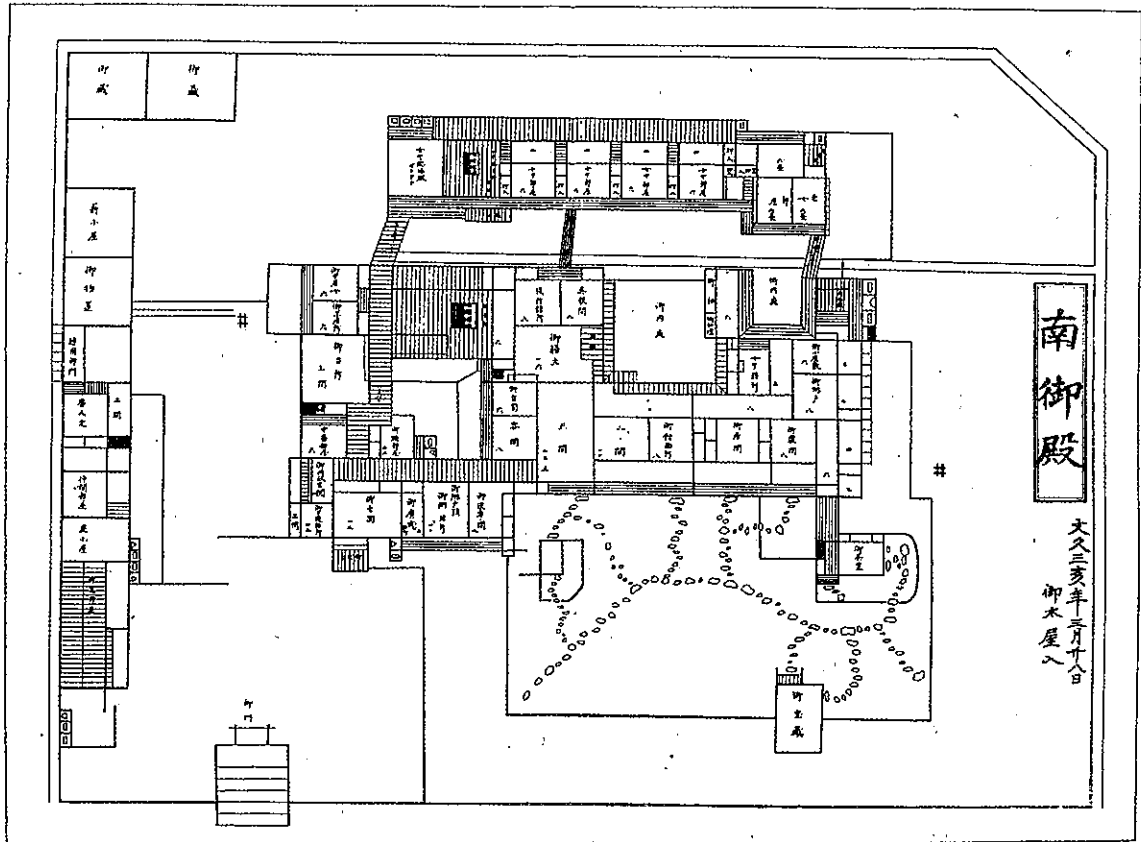


犬鳴別館裏門の石垣



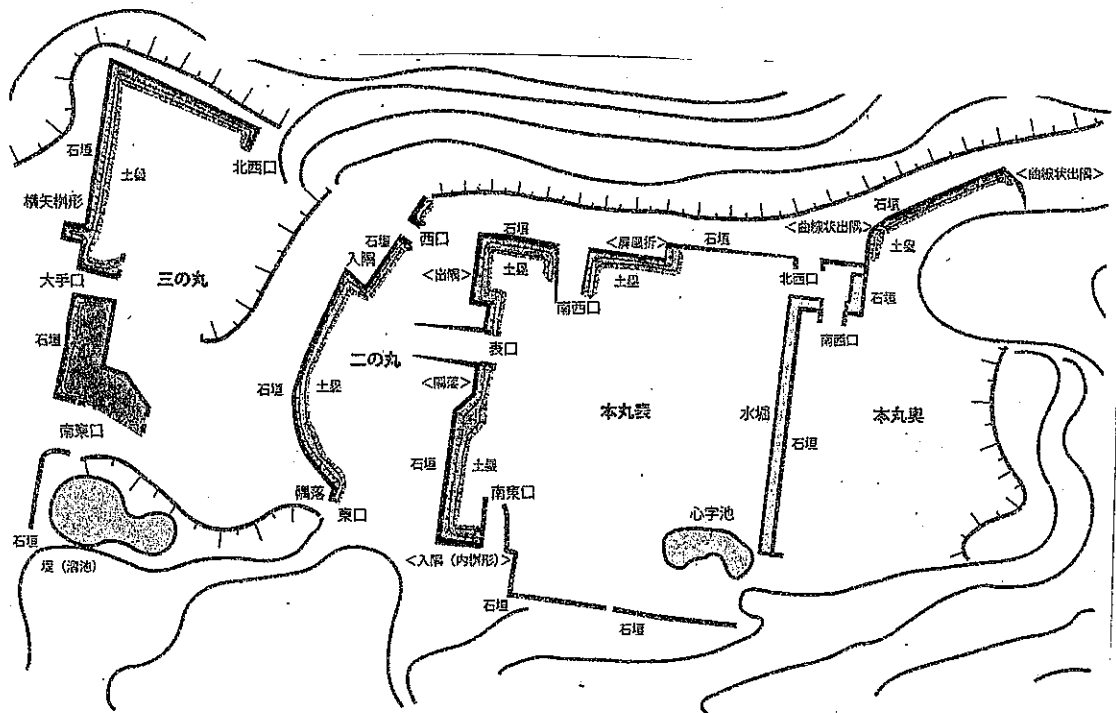
犬鳴別館絵図（藩主館部分・宮若市教育委員会蔵）

秋月藩南御殿 (文久3年)



秋月藩南御殿平面図

勝山御殿 (山口県下関市)



勝山御殿縄張り図

勝山御殿跡における発掘調査から見た縄張り推定図 (右が北方向、1:2,000)

## 「日本で最後に築かれた城 —旭城のことなど—」

美夜古郷土史学校 山内 公二

### 1 小倉新田藩の成立

小倉藩では、寛文11年（1671）2代藩主 小笠原忠雄が相続をした時、2万石余の新地のうちから、幕府の許可を得て、弟の真方（さねかた）に1万石余を与え、小倉新田藩を成立させた。領地は築城郡の内22ヵ村（現在の築上町築城と椎田の一部）とした。その後、貞享2年（1685）、上毛郡の内黒土手永と岸井手永の26ヵ村（現在の豊前市と上毛町の一部）と交換した。

小倉新田藩の藩主は小倉城郭内の篠崎に住んだので「篠崎公」と呼ばれた。家老は本藩家臣が務め、所領の村々の支配も本藩の郡代、筋奉行が管轄し、本藩まかせであった。

### 2 将軍との主従関係が強い大名

小倉藩の分家のようなが、幕府に対しては一藩の大名としての諸役が課せられた。3代貞顯（さだあき）は2度にわたり大坂加番を務め、4代貞温（さだあつ）は大番頭、江戸城西丸若大将、本丸若大将を、5代貞哲（さだとし）と9代貞正も大番頭を務めた。

### 3 新田藩が本藩体制を補強

新田藩と小倉藩本藩の相続関係は、初代真方が本藩2代藩主の忠雄の弟であることをはじめ、2代貞通が忠雄の三男を養子に迎えて継がせるなど、当初から緊密なものがあつた。さらに、7代貞嘉（さだひろ）は6代貞謙（さだよし）の弟だったが、本藩7代藩主忠徹（ただあきら）の急死により、貞嘉は新田藩主を兄貞寧（さだやす）に譲り本藩8代藩主となった。

幕末期、尊王攘夷運動激化の最中の慶応元年（1865）、本藩9代藩主忠幹（ただよし）が病死。新田藩9代藩主貞正はわずか3歳の嗣子豊千代丸（忠忱）の後見を務めた。

### 4 小倉城落城。香春を経て領内へ

慶応2年（1866）8月1日、長州藩との戦いで小倉城を自焼した際、篠崎館も焼失した。本藩とともに、田川郡香春に移り、慶応3年1月に長州藩との和議が成立。同年3月、本藩は香春に藩庁を開き、香春藩がスタートした。

新田藩主の貞正は、慶応2年11月、香春から自領に入り、安雲村（上毛町）の光林寺を仮りの住まいとした。その後、千塚原（豊前市）に藩庁（藩邸）を建設することとした。

新しい藩庁の面積は、1447坪。正面（長さ90間）と側面には高さ2間の石垣を築く。石は、周辺の塔田、野田、吉木、今市に点在する古墳の石を採取した。土台の基礎工事には膨大な土が運び込まれたが、周辺住民のその工事にあつた。棟梁は久路土村の水野棟三郎。藩庁（館）の建設資金の大半は宇島の豪商 万屋（小今井潤治）が献金した。

完成は、明治2年（1869）11月とも明治3年10月26日ともいわれる。千塚原は千束と改名され、小倉新田藩から千束藩となった。

城の名前は旭城と名づけた。

明治4年6月の藩の分限帳によれば、士族132人侍医1人、直医5人、卒族（足軽以下の下級武士）143人の合計281人。士族で最高の禄高の者でも、10石3人扶持。以下6石までがしぞくで、卒族は5石か4石の扶持であった。

## 5 本藩の動き

香春藩は、新しい藩庁をどこにするか、明治元年（1868）11月、藩士が投票、仲津郡錦原（みやこ町豊津）と決定。明治2年1月、藩庁建設に着手し、10月に竣工。11月、香春から錦原に藩庁を移し、地名を錦原から豊津と改め、豊津藩が成立した。藩庁や会計局、民政局、市政局、社寺局などが新設されたが、その建設費は藩内の豪商からの献金で賄われた。明治3年1月には藩校育徳館が開校した。

## 6 廃藩置県

明治4年（1871）7月14日、廃藩津県。千束藩は千束県。豊津藩は豊津県となる。同年11月14日、千束県と豊津県は小倉県に編入したが、明治9年（1876）小倉県を廃し、福岡県に合併した。

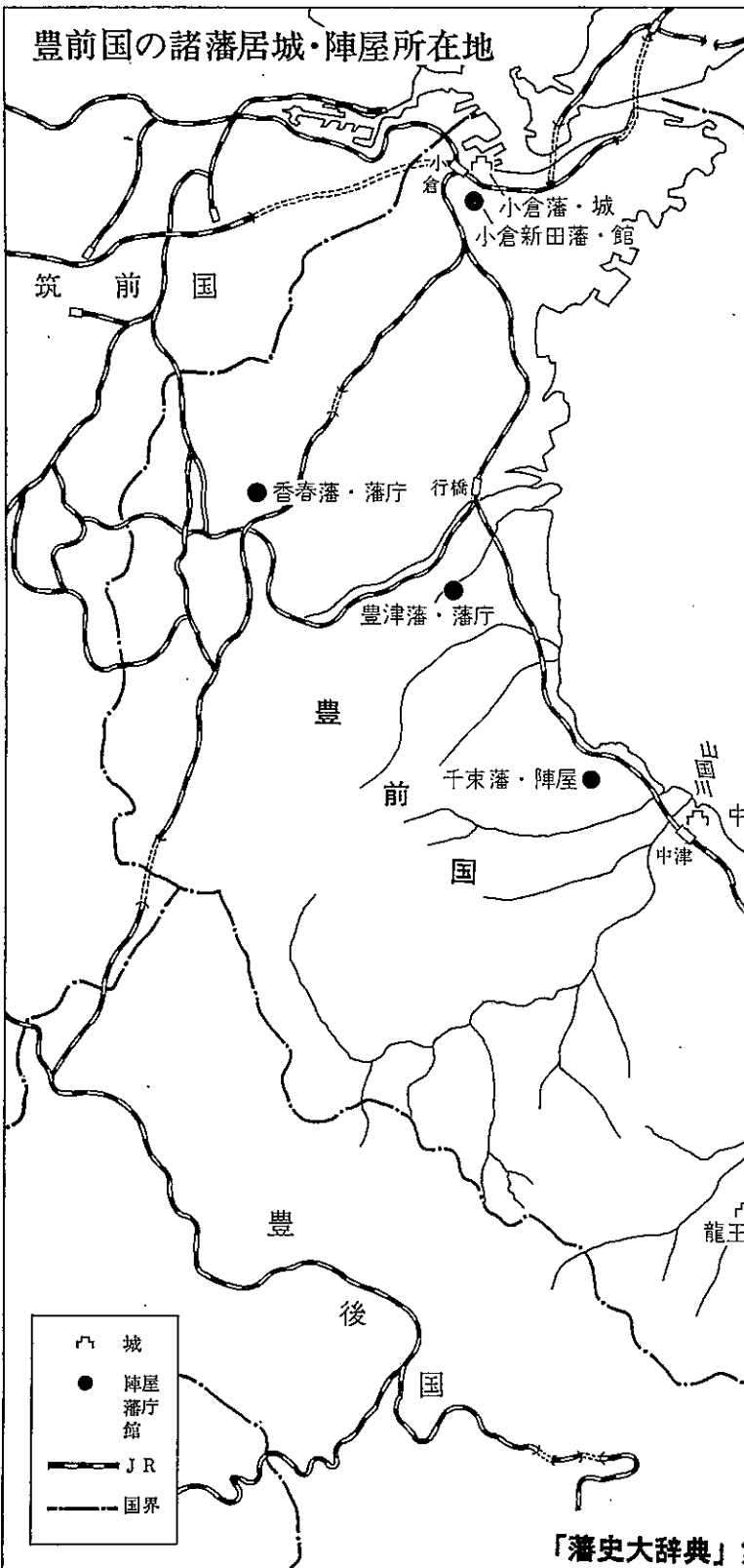
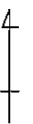
## 7 その後の旭城

廃城となった旭城の跡には、その後、千束八幡神社が建ち、石垣だけが残っている。館の建物は、上毛町安雲の光林寺の庫裏として、城の門は豊前市八屋の賢明寺の山門として、それぞれ使用されている。

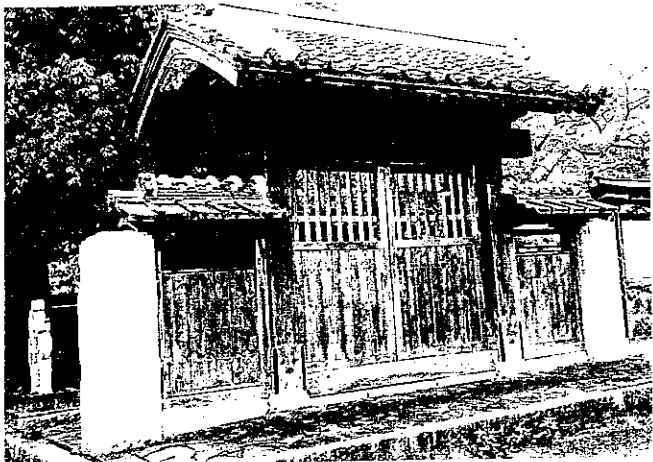
旭城跡にほど近い丸山墓地に藩主・貞正とその一族の墓がある。殿様の墓とは思えない質素な墓だった。

## <参考文献>

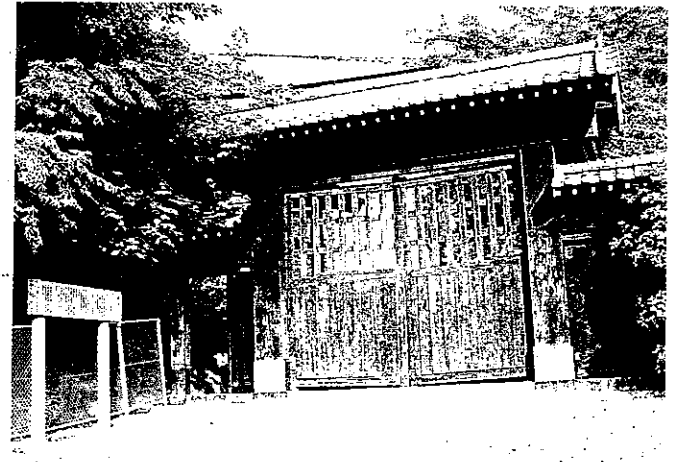
『豊前市史』、『豊津町史』、『日本歴史地名大系 41 福岡県の地名』（平凡社）、『角川日本地名大辞典 福岡県』（角川書店）、『福岡県の幕末維新』（アクロス福岡）、『豊前幕末傑人列伝』（海鳥社）、『藩史大辞典』第7巻 九州編（雄山閣出版）



「藩史大辞典」第7巻 九州編より

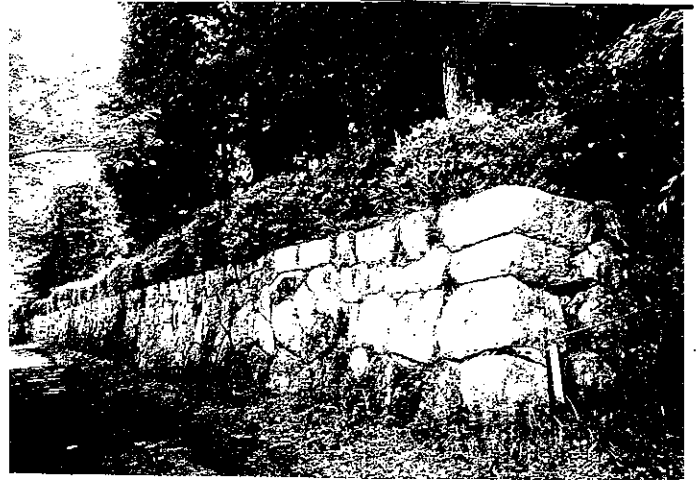


旧香春藩庁門 (香春町本町)

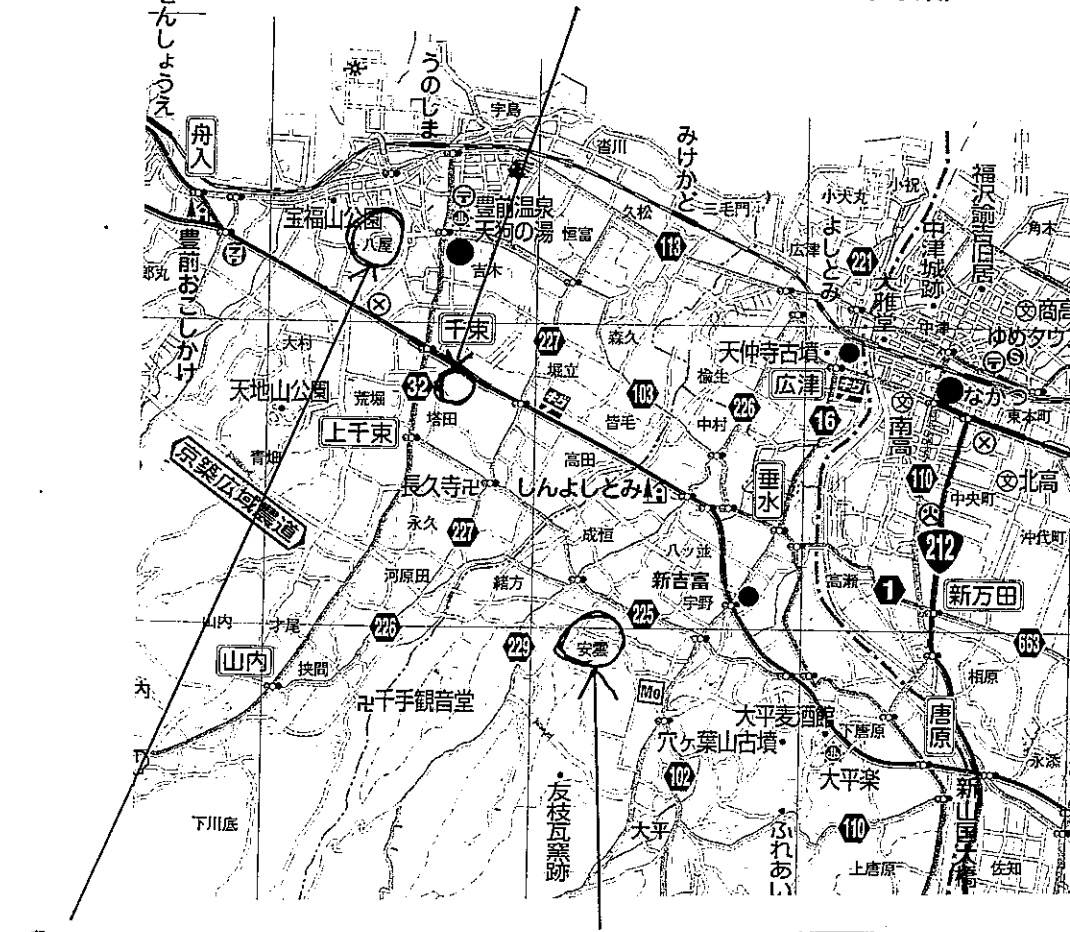


藩校育徳館黒門 (みやこ町豊津)





旭城の石垣 (豊前市千束) 旭城の石垣 (豊前市千束)



旭城の門 賢明寺の山門 (豊前市八屋)



旭城の館 光林寺の庫裏 (上毛町安曇)





付近の古墳から集めた石で築かれたといわれる旭城の石垣＝豊前市千東

豊前市千東の丘陵地に高さ2.5mのがっちりとした石垣が90度にわたって続く。石垣中央部には10段ほどの石段があり、これを上ると正面に千束八幡神社が祀られている。

「今はお宮ですが、1870（明治3）年、ここに旭城という居館が建てられました。しかし翌年、廃藩置県のため廃城となり、築城間もない旭城はその使命を終えました。ここ旭城跡は、日本で最後に築かれた城跡なのです」と豊前市文化財保護審議会会長の尾座

本雅光さん(68)が説明してくれた。

旭城が築城される経緯は「築上郡誌」にくわしく記されている。

1671（寛文11）年、小笠原小倉藩の初代藩主忠真の四男真方は2代藩主忠雄から、築城郡（現築上郡築上町）のうち1万石を分封されて小倉藩の支藩・小倉新田藩が成立した。その後、1684（貞享元）年、上毛郡（豊前市と上毛町）の一部26村と替え地となった。

小倉新田藩の代々の藩主

## 日本で最後に築かれ1年で廃城

は小倉城下の篠崎に居館を構えていたので「篠崎藩」とも呼ばれていた。1866（慶応2）年、小倉藩は長州との戦いに敗れ、小倉城と篠崎邸は焼け落ちた。新田藩の9代当主・貞正は小倉藩主の小笠原豊千代丸とともに田川郡香春に逃れた。

その後、貞正は領地である安曇村（現上毛町）の光林寺に仮住まいして、千塚原に新藩庁（居館）を構える準備を始めた。千塚原はその名の通り多くの古墳が存在していたといわれ、この古墳の石を取り崩して石垣を築いたという。居館は

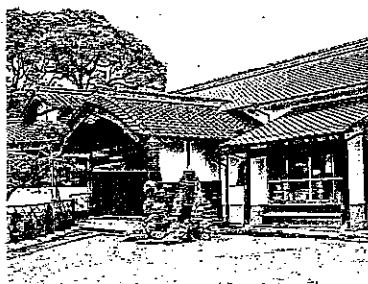
1870（明治3）年に完成。旭城と名付けられた。この時、旭城一帯の地名は千塚原から千束に改められ、藩名も小倉新田藩から千束藩となった。しかし、旭城完成の翌年7月、廃藩置県によって、千束県となり、同年11月には豊津県（旧小倉藩）とともに小倉

県に編入された。旭城は完成後わずか1年で廃城となった。

「旭城の建物の一部が光林寺にある」と聞いたので寺を訪ねた。住職の大神信知さん(81)は「うちの寺の庫裏は旭城の建物を譲り受けたものだ」と聞いています。城の門は、豊前市八屋の賢明寺の山門になっているそうです」と教えてくれました。庫裏の玄関はごしりとした造りで、往時が偲ばれた。

旭城跡にほど近い丸山臺地に藩主貞正とその一族の墓がある。殿様の墓とは思えない質素な墓だった。

（美後古郷土史学校 事務局長 山内公二）



旭城の建物を移築して建てたといわれる光林寺の庫裏＝上毛町安曇

ミニガイド 旭城跡への行き方 ①JR宇島駅前から豊前市バス求菩提資料館行きに乗り、千束小学校前下車（15分、100円）、そこから歩いて15分。

車では、国道10号千束交差点から県道32号を山側に500m付近まで、千束小学校前交差点を東に行くとある。駐車スペースあり。

## 「三池藩立花家の歴史と三池陣屋について」

大牟田市三池カルタ・歴史資料館 梶原 伸介

### 1. 三池藩の歴史

三池藩は、元和 7 (1621) 年に高橋統増（立花直次、柳河藩初代藩主立花宗茂の実弟、豊臣政権期に筑後国三池郡 1 万 8 千石を領知、関ヶ原合戦で西軍に与したため改易）の嫡子の立花種次（宗茂の甥）に、三池郡のうち 15 か村 1 万石が与えられ成立した外様小藩である。藩領は現在の大牟田市の南半分に相当し、北半分は柳河藩領に属した。藩主は初代の種次以降、種長、種明、貫長、長熙と 5 代続き、若年寄として幕政に参加していた 6 代藩主種周が、文化 3 (1806) 年に幕府の内紛に巻き込まれ蟄居・謹慎処分となり、種周の嫡子種善が陸奥国下手渡（現福島県伊達市月舘町）に領地替えとなる（下手渡藩の成立）。その間、三池の地は幕府領（天領、日田代官支配）から柳河藩預かり地となり、幕末の嘉永 4 (1851) 年に藩領の半分が返還された。

その 2 年前の嘉永 2 (1849) 年に家督を相続し藩主となった立花種恭（初代下手渡藩主種善の弟種道の子）は、文久 3 (1863) 年 6 月に 28 歳で幕府の大番頭に召し出され、同年 9 月に若年寄に昇進する。慶応元 (1865) 年には 14 代将軍家茂の側近として第 2 次長州征伐へ随行、兵庫開港問題等の懸案事項ではイギリス公使やフランス公使と外交折衝を重ねるなど、幕末の政局運営に奔走した人物だった。同 4 年 1 月 10 日には老中格兼会計総裁に就任するが、維新政権の樹立により辞職し、新政府へつく方針を固める。これにより下手渡藩は奥羽越列藩同盟に加盟する東北諸藩から敵視され、仙台藩兵によって陣屋が攻撃を受け焼失してしまう。

維新後の明治 2 (1869) 年に三池領が完全返還され、同年 6 月の版籍奉還により種恭は三池藩知事に任命される。しかし明治 4 年に廃藩置県が断行され三池県が設置されると免職となり、東京居住を命じられる。同年 11 月に三池県・柳川県・久留米県の筑後 3 県が合併し三潁県が成立し、三池藩は終焉を迎える。

### 2. 三池陣屋再興の記録（「草葉家文書」より抜粋）

文化 3 年に幕府の若年寄の要職にあった三池藩 6 代藩主立花種周が失脚し、陸奥国下手渡へと転封処分となった。それ以来、幕府に対し度重なる旧領三池への復封歎願を行ない、45 年後の嘉永 4 (1851) 年に三池領のうち 5 か村（今山・新町・稲荷・下里・一部）5,071 石が返還され、下手渡領 3,078 石を幕府に返上した。

これに伴い、嘉永 5 年閏 2 月に今山村の村民や新町の町民から土地や金品が献上され、この中に陣屋の再建に必要な「瓦」や「壁縄」、「畳」、「杉」、「御門金具」などが含まれていた (①)。

陣屋 (御長屋) の再建に必要な約 1,000 両は、三池立花家の下手渡転封中に三池で石炭の採掘で財を成した藤本傳吾や周防の船問屋などの献金で賄われた (②)。

5 か村の庄屋は陣屋普請につき、「公役夫」を出すことになり、そのため蛭子町の庄兵衛の元屋敷を借り住み込ませた。さらに「預所」の村々からも「加勢夫」を出している (③)

陣屋 (御長屋) の建築にあたる大工棟梁は、万七・喜助・村右衛門・助作・嘉一郎の 5 人で、その下に大工 20 人を従え、嘉永 5 年 2 月から工事が始まり 3 月 8 日には棟上げとなったが、内普請がはかどらずにようやく 4 月晦日に引越となった (④)

陣屋 (仮御殿御役所) の建築にあたる大工棟梁は、上記の 5 人で 5 月上旬から工事を開始した。御支配大工以下 45 人と大鋸 20 人が一日も休まず工事に励んだので 8 月 4 日の吉日に棟上げを行ない、お祝いには「幾万人」の見物人が押し寄せ賑々しく終了した (⑤)

### 3. 「元三池御陣屋地図」の検討

本図は江戸末期の三池藩陣屋の様子を、明治維新後間もない明治 6 (1873) 年頃に描いたものとされる。三池藩陣屋に関する絵図類や史料はほとんど残っていないため、同時代の史料ではないものの本図は当時の様相を知ることができる貴重な地図である。陣屋が置かれた場所は、現在は大牟田市立三池小学校の敷地とその周辺で、同地には「御門」や「陣屋」などの小字名が残っている。

地図の左端 (西側) に総坪数と建屋坪数が記されており、惣坪数は 5,370 坪、建坪は 670 坪である。

図の南側に東西に流れるのは堂面川 (2 級河川、川幅 2 間半・深さ 7 尺) で、大牟田市内を横断し有明海に注ぐ。堂面川の南側には土堀と練堀で囲まれた馬場と思しき広場 (長さ 54 間・351 坪) が描かれている。東は丘陵で西と東には堀が巡らされている。南側から眼鏡橋を渡ると、左手に藩校の修道館 (安政 4 年開設) と武場があり、修道館の屋根部分は「茅葺」と記されている。

再び正面に戻り練堀の中に入ると両脇に松並木があり、奥には石段と表門が描かれている。現在は石段のみ現存しており、表門は現在、寿光寺 (田町) に移設され山門として使用されている。表門前広場の西に「厩」と「士族卒住居」があり、「士族卒住居」は茅葺きで、居住する 5 名の士族の氏名が記されている。このうち、立花碩 (景福、1836~1915) は、三池藩最後の家老で、幕末の京都で庵原康成とともに藩主立花種恭を補佐、維新後に藩主種恭が旧領の三池に戻ると、碩一家も下手渡から三池へ移住する。廃藩置県後は、三

池県の少参事・議長を務める。なお、碩の長男小一郎はのちの陸軍大将や福岡市長などを歴任、次男銚三郎は学習院教授となり、ダーウィンの『種の起源』を初めて日本に紹介した人物として知られる。その「厩」と「士族卒住居」の道を挟んで西側にも「士族住居」が描かれているが、「自普請」とあることから、幕末の三池再封時に居住者が自前で建設した可能性もある。ちなみに士族とは武士階級のうちで足軽以上の者、卒は足軽以下の身分の者を指すが、卒の呼称は壬申戸籍が作成された明治 5 年に廃止され、士族か平民かどちらかに編入された。

さて、表門を入ると、東と南を練塀、北と西を堀（水路）で囲われた空間（3,691 坪）が広がり、正面に「縣廳（県庁）」と記された建物（90 坪 7 合 5 勺）がある。これが藩政を司っていた政庁（表御殿）である。「縣廳」の上部には「星霜二十年」と記されているが、これは三池（下手渡）藩領のうち半分の 5000 石が返還された嘉永 4（1851）年から数えて 20 年目という意味だと解される。同じく「星霜五年」の建物群は、藩主が三池を居所とすることを認められた明治元年 9 月以降に作られたものであろう。なお、「縣廳」の建物の一部は、昭和 26 年に三池小学校の郷土資料館として転用され、昭和 47 年まで活用されたが、同 48 年の三池郷土館の開館にあたって、玄関屋根部分のみ移築され他は取り壊された。

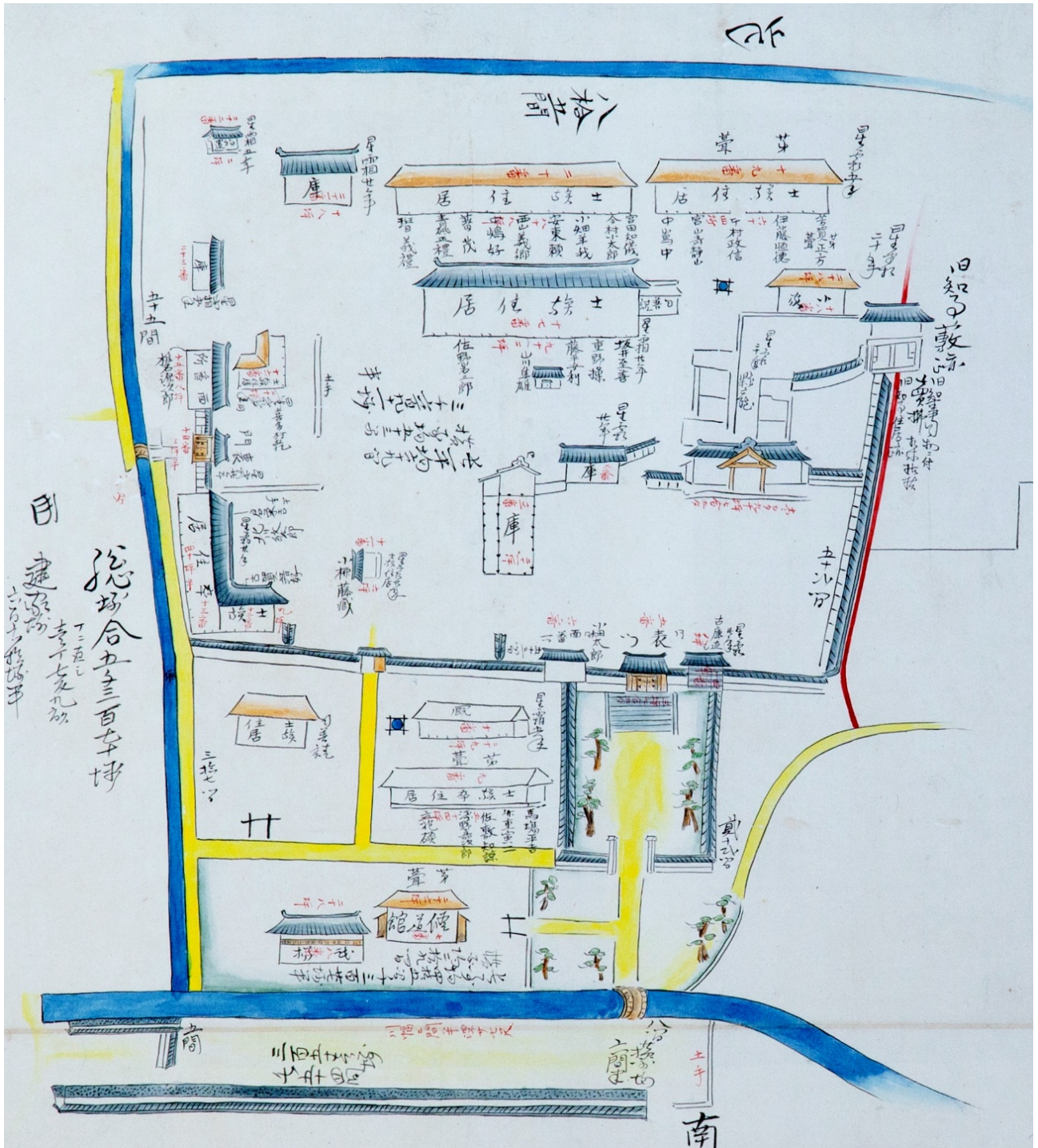
さらに「縣廳」の練塀を挟んで東側に「旧知事や敷跡」と記されていることから、この場所に藩主の居住空間があったはずだが、「旧知事自物ニ付売払ニ相成居候旧知事住居跡」とあるように、明治 4（1871）年の廃藩置県の際に三池藩知事を免職された立花種恭が、東京集住を命じられたのを機に売却したものであろう。

この表門の内側には、「士族住居」が 5 か所、「士族卒住居」が 1 か所、「面番所」が 2 か所描かれていて、これら住居には明治 6 年の段階で 26 名の氏名が記載されている。明治 5 年作成の「旧三池県士族禄渡帳」によると、当時の三池在住の士族数は 118 名であることから、全体の約 22%の士族が陣屋内で生活していたことが判明する。一方、陣屋外に住居を持った士族については判然とせず、今後の課題である。

三池藩陣屋建物（部分）  
現・大牟田市立三池小学校

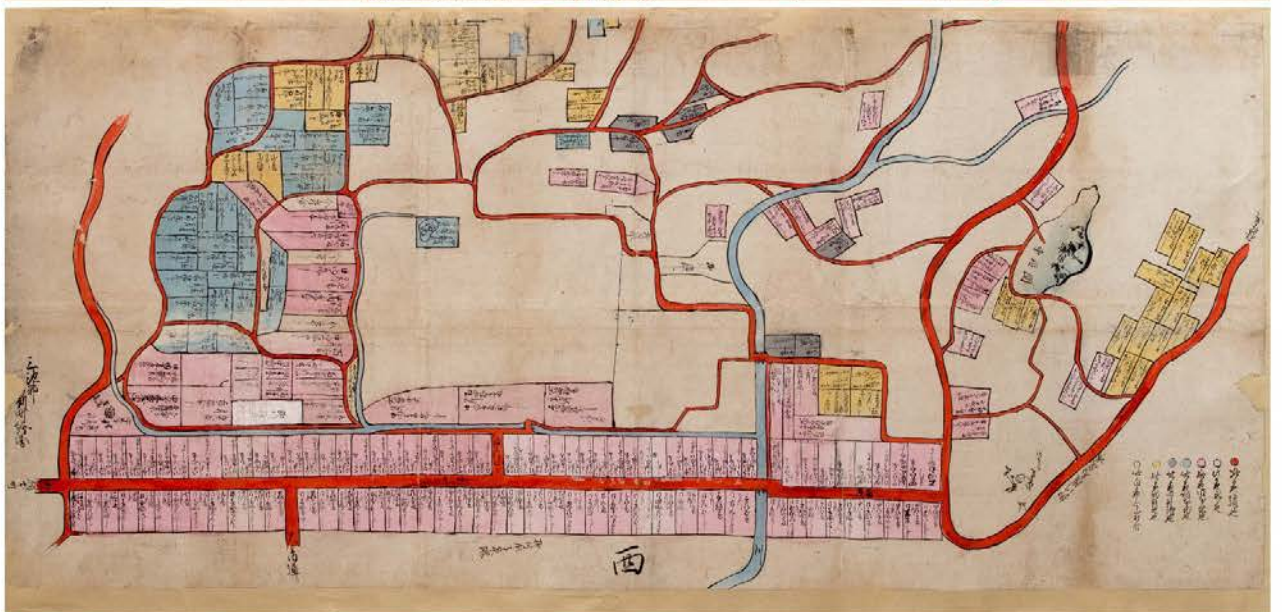
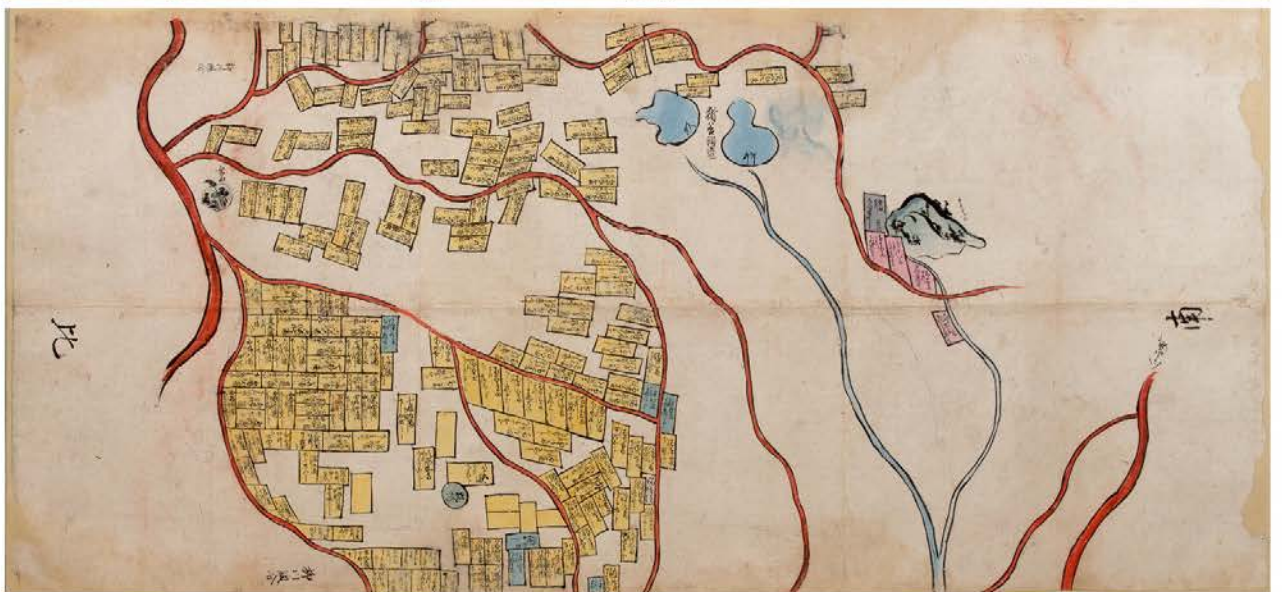






三池藩陣屋地図 (大牟田市三池カルタ・歴史資料館所蔵)





三池郡新町絵図(江戸末期)(大牟田市三池カルタ・歴史資料館所蔵)





平成27年7月20日

第49回 福岡県地方史研究協議大会

編集兼発行 福岡県立図書館郷土資料課